ドラゴンボール外伝

沢渡限

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは本編では描かれていない、ひょっとしたらあったかもしれないドラゴンボールのサイドストーリー。

目　次

ウーブの師匠はあの男!!　孫悟空と２８年ぶりの再会 ―――― 1
サタン世界チャンピオンへの道!!　第２４回天下一武道会～前編～ ―――― 11
サタン世界チャンピオンへの道!!　第２４回天下一武道会～後編～ ―――― 20
絶望への反抗!!　誇り高きサイヤ人の王子、ベジータの最期!! 28
絶望への反抗!!　悟飯にすべてを託して、ピッコロとクリリンの最期の戦い!! ―――― 36
絶望への反抗!!　最後の仙豆を届けよ、ヤジロベーとカリン様の決死の作戦!! ―――― 49

ウーブの師匠はあの男!!　孫悟空と２８年ぶりの再会

　それは後にドラゴンボールによって人々の記憶から消去され、一部の関係者を除いて誰からも忘れられてしまった、この世の命運を賭けた大決戦だった。
「おめえはすげえよ……たった一人で」
　遥か太古の昔、魔導師ビビディによって生み出され、その息子であるバビディによって復活した最強の魔人ブウ。
　何度も何度も姿を変えて、途方もない強さで悟空達を苦しめてきた。
「何度も姿を変えて……いい加減嫌になっちまうくれえにな」
　そんな強敵魔人ブウとの決戦に、ピリオドが打たれようとしていた。
「今度はいいヤツに生まれ変われよ。１対１で勝負がしてえ、待ってっからな」
　地球人全ての元気が込められた、特大の元気玉。
　かつてサイヤ人との戦いに備え、界王様の下で修行した時に習得した必殺技を、悟空は魔人ブウにぶつけていた。
　かめはめ波よりも、スーパーサイヤ人３よりも、何よりも強力なとっておきの技。
「またな」
　悟空は人差し指と中指を額に当てて、そう言いながら微笑んだ。
「カカロット!!」
「お父さん!!」
「悟空!!」
「「行けえーーーーーッ!!」」
　ベジータ、悟飯、ピッコロ、そして地球のみんなや神々に至るまで、全員が悟空にこの世の命運を託した。
　そして――。

「はあああああああああああああああああああッッ!!」

「ウ ギャ ギャ ギ ア ーーーーーーーーッ!!」

魔人ブウは消滅した。

細胞一つ残らず、完全にその存在がこの世から消滅したのだ。

――戦いは悟空たちの勝利に終わり、世界は救われたのである。

それから悪い魔人ブウと分離した魔人ブウは、ミスターサタンの家で暮らすことに。

しばらくしてドラゴンボールによって魔人ブウの記憶は消去され、魔人ブウは張れて外を堂々と歩けるようになった。

こうしてこの戦いは誰の記憶にも残らない、伝説の戦いとなったのである。

「悟空のヤツ、あっぱれだな。これはワシからのプレゼントだ……楽しみにしておくのだ」

さらにしばらくして、閻魔大王の純(いき)な計らいによってミラクルな事が起きた。

「おぎゃあ!! おぎゃあ!!」

悟空達が暮らすパオズ山からも、ブルマやベジータ達が暮らす西の都からも遠く離れた辺境の村にて、一人の男の子が産声をあげた。

その男の子はなんと、あの魔人ブウの生まれ変わりだった。

男の子はウーブと名付けられ、辺境の村ですくすくと育っていった。

ウーブが4歳になった頃だった。

「ウーブ君をこのワシの弟子にさせてもらえんかね?」

老齢に達しながら筋骨隆々とした肉体を持ち主が、ウーブの生家を訪ねていた。

「ええ、うちの子を弟子に……ですか?」

「このあいだの幼稚園での孫との喧嘩、聞き及びましてな、ウーブ君には才能がある。ウーブ君はきっと素晴らしい武道家になれるとワシ

は思うのだ」
頭髪は全て白髪で、顔は皺(しわ)だらけだが、その肉体だけは全盛期を維持し続けている。
どこかの修行僧のような風貌の老人が、ウーブの母親を説得しようとしていた。
「我が孫(まご)がウーブ君をイジメた事がキッカケゆえ、そのケジメもつけたい。どうかな？」
「まあ、天下一武道会で優勝したあなたが仰られるのなら……」
「このチャパ王、必ずやウーブ君を世界に誇れる武道家に育て上げましょう」
それはかつて参加した天下一武道会において、ただの一度も掠られずに優勝を果たすも、その後の大会では二度も悟空と戦い、そして敗れた悲劇の武道家・チャパ王その人だった。
チャパ王は第２３回天下一武道会の予選で悟空に破れて以降、イチから出直すつもりで修練を重ねてきた。そして長い修行の旅の末(すえ)、下山したのはセルゲームの頃だった。
そこでチャパ王はテレビ中継を見たのだ。
──あの男はッ!!
中継では散々コケにされていた金髪の男。
しかしチャパ王はその正体にイチ早く気付いたのだ。
──間違いない、孫悟空だ。
二度も自分に煮え湯を飲ませたその男の顔を、たとえ髪型が変わろうが目の色が変わろうが見間違うはずがない。
そして中継を見て、チャパ王は絶望したのだった。
この時、チャパ王の戦闘力は長い修行の末、１８０程度になっていた。
これ第２２回天下一武道会における、悟空や天津飯と同等レベルである。
しかしセルゲームで見せた悟空やその息子、悟飯の強さは世界そのものが違った。
悟空ヘリベンジを果たすべく修行を重ねてきた身ながら、そのレベ

ルの差は最早埋められるものではないことを実感させられた。
それからチャパ王は村へ戻ったのだ。
自分も、もはや歳である。
自分には、才能がないことを思い知らされた。
ゆえに自分がやるべきことは一つしかない――後進の育成に専念することであると。
そう気づいたチャパ王は村へ戻り、村の子供たちに武術を教える事にした。
「腐敗した武道界を、ワシの門弟(もんてい)たちが正(ただ)してくれることを祈る」
武術の達人であるチャパ王は気づいていた。
ミスター・サタンが弱いことに。２５回大会で準優勝となった１８号との試合も、直近で行われたミスター・ブウとの試合も、全て八百長であることに。
根っからの武道家であるチャパ王は、それが許せなかった。
とはいえ、ミスター・サタンも常人のレベルでは決して弱いわけではない。
それにミスター・サタンには恐るべき相棒、ミスター・ブウが存在すること。
このミスターブウに勝てる可能性を秘めた人材――そう彼が見抜いたのがウーブだった。

――それからさらに６年後、魔人ブウとの戦いから１０年後。

「遠慮はいらん。かかってきなさい、ウーブ君」
「はい、お師匠様……ッ!!」
ウーブのとてつもない突撃を、チャパ王は間一髪で躱(かわ)す。
「はぁ!!」
「くぅ……っ!?」
瞬く間に放たれたウーブの飛び蹴りを、どうにか受け流しながらチャパ王は後ろへ跳躍(ちょうやく)し、ウーブとの間合いをとった。
(やはりパワーではとっくの昔に、このワシを上回っている!!)

冷や汗ダラダラ。
何年も前から感じ取っていたことだが、完全にウーブはチャパ王の実力を上回っていた。
チャパ王がウーブに対して勝っているのは、長い経験のみ。
「本気で行くぞ!!　受けてみよ――我が八手拳(はっしゅけん)を!!」
八手拳、それはあまりの速さに腕が８本にも見えるというチャパ王の必殺技。
ウーブとの間合いを一瞬で詰めて、チャパ王は渾身の拳技(けんぎ)をウーブに浴びせる。
しかしチャパ王の八手拳をウーブは全て躱してしまい、一発も拳はウーブに届かない。
「はっ!!」
チャパ王の八手拳の欠点、それは足元がお留守になってしまうこと。
ウーブは即座に姿勢を低くし、下段の足払いでチャパ王をこけさせた。
「はあああああああっ!!」
そしてウーブは立ち上がり、チャパ王に飛びかかって、その拳をチャパ王の鼻先で寸止めした。
(見事な一本だ。見えんかった……このワシの目には……ッ!!)
チャパ王の全身から力が抜けた。
武術的な脱力ではなく、戦意の喪失も含めた真なる意味での脱力。
「ワシの完敗じゃ……」
「お、お師匠様、大丈夫ですか?」
「フフフ、ワシは嬉しいぞ。おぬしの拳速(けんそく)はあの男を上回っていた」
チャパ王の脳裏には、孫悟空の姿が浮かんでいた。
忘れもしない、自分が太刀打ちできなかった若き戦士。
「あの男?」
「昔の話だよ。そうだ、ウーブ君。まもなくだが、天下一武道会が開催される。そろそろ君も出場してはどうかな?」
今のウーブなら孫悟空はもちろん、ミスターブウには勝てないかも

しれない。
しかしきっといい線は行くはず。
自身との組手の経験しかないウーブにとって、ミスターブウとの試合はきっと素晴らしい経験になるに違いない。
チャパ王はそう思い、ウーブの出場を勧めた。
「天下一武道会って、あの天下一武道会ですか？」
「左様。このワシもかつて参加した、あの天下一武道会だ」
「……けど、オイラなんか出ても」
「何を言っておる。このワシはかつて、あの天下一武道会の優勝経験者だ。そのワシをウーブ君は全く苦労することなく、簡単に倒してのけている。君はワシのお墨付きだ、よい修行と思って参加してみるといい」
チャパ王は、体で理解していた。
もはやウーブは自分の手には置けない存在。
もうとっくに自分が通用するレベルを超越してしまっていることに。
だからこそウーブにはウーブ以上の強者との戦いが必要だと、チャパ王は考えていた。
「それに天下一武道会で優勝すれば賞金が貰える。パパとママを楽にしてあげられるぞ」
「お師匠様……わかりました。オイラ、天下一武道会に出てみるよ」
「その心意気だ」
目を輝かせるウーブの姿に、チャパ王は思わず微笑んだ。

◇　◇　◇

――それから瞬く間に時は経って、第２８回天下一武道会が開催された。
ウーブは両親に付き添われ、天下一武道会の会場へと向かった。
チャパ王は弟子たちへ稽古をつけたあと、ウーブの戦いぶりを見るためにテレビをつけた。

「ほう、やはり予選は軽々と突破したか」
参加選手の中にウーブがいることを知り、チャパ王から笑みが零れる。
幼い頃から才能を確信し、自分が教えられることの全てを伝えた弟子の晴れ舞台。
しかしチャパ王の笑みは、途端に驚きへと変貌する。
「こ、この男は……ッ!!」
忘れもしない、独特な髪型をしたあの男。
なんと孫悟空が、今回の天下一武道会に参加していたのだ。
「どうされたんですか、チャパ王？」
「フフフ、ワシの弟子とワシの因縁の相手か……これは面白くなってきた」
対戦カードが決まった。
ウーブの対戦相手は、あの孫悟空だった。
経験不足なウーブが勝てる可能性は低いだろうが、ウーブの秘めたパワーはチャパ王自身も把握しきれないほどに膨大である。
孫悟空が相手なら、ウーブが秘めた力を全て解放できるだろう。
その力が解放された時、きっと孫悟空はビビるだろうと、チャパ王は期待に胸を膨らませた。
そしてチャパ王の読みは、まさしく正解だった──。
『お父さんも、お母さんも、ウンコタレじゃなああーーーーーーいッ!!』
ウーブの蹴りを受け止めた悟空は、その腕が痺れた様子だった。
そしてその隙にウーブは悟空に強烈な突きを放ち、悟空は衝撃でぶっ飛ばされてしまった。
「ちゃ、チャパ王……ウーブ君って、あんなに強かった……でしたっけ？」
「ふ、フフフ……はぁーーーっはははははははは!!」
「チャパ王!?」
「いいぞ孫悟空。目覚めさせるのだ……ウーブ君に秘められた本当の力を!!」

テレビに向かってチャパ王は、高らかな笑い声をあげた。
『ワクワクしてくるぜ……間違いねえ、おめえは悪のブウの生まれ変わりだ!!』
『はあああああああああああッ!!』
それからウーブと悟空の激闘は続いた。
「信じられん。戦いの中で、戦い方を学んでやがる」
その戦いぶりはベジータが。
「う、ウソだろ?!」
「なんだあの子は?!」
「信じられない!!」
「ひょっとして孫くんが言っていたすごいヤツって、あの子のことなの!?」
クリリンが、悟飯が、ビーデルが、そしてブルマもウーブの強さに驚愕していた。
ウーブは悟空との戦いを通して、さらに戦闘力を増していく。
悟空とウーブの戦いはさらに激しさを増して、文字通りの激闘となっていく。
――だが、勝負は意外にも呆気なく終わった。
激しい戦いの末、武舞台が崩壊してしまったのだ。
そしてウーブは落ちてしまいそうになった。
『そうか、おめえまだ空の飛び方の知らねえんか』
しかし寸前のところで悟空がそれを助けた。
『こんな風に戦ったのは初めてなんだろ? オラがこれからおめえん家に一緒に住んでおめえに戦い方を教えてやる。な、いいだろ?』
そのやり取りは、すべてテレビで中継されていた。
当然、それを見ていたチャパ王の耳にも入った。
「……ご客人だ、招き入れる準備をしろ」
「え? は、はい!!」
チャパ王は静かに立ち上がり、弟子にそう指示をした。
それから悟空がウーブの村へ到着するのには、小一時間もかからなかった。

「あの、悟空さん。オイラちょっと寄りたいところがあって……」
「寄りてーとこ？」
「はい。オイラに武道を教えてくれたお師匠様のところに……あ、ここが道場です!!」
　村の中でも寺に次いで大きな施設。
　この村を中心に、周辺から弟子たちが集まり、大きくなったチャパ王の道場である。
「よくぞ来てくれた。歓迎するぞ……孫悟空」
　建物の中から出てきた老齢の男に名前を呼ばれ、悟空は反応した。
（なんだこいつは。チチや牛魔王のおっちゃんよりずっと気がでけーぞ？）
　悟空からしてみれば大した実力ではないのだが、その気の大きさは亀仙人をして達人と言わしめるチチを遥かに上回るものだった。
　それにどこか、見覚えのある風貌をしていた。
「お、おめえは……」
「貴様とはかつて天下一武道会の予選で二度、戦ったことがある」
「……あああーーーーーーーーッ!!　思い出した、おめえひょっとしてチャパ王か!?」
「如何にも、ワシがあのチャパ王だ」
「ひゃあーっ!!　おっでれーたぁ!!　懐かしいなぁー、おめえすっかりじいちゃんだな!!」
「貴様が変わらなさすぎるのだ。いくらあの時少年だったとはいえ、もう何十年も前の話だというのにな……」
　チャパ王にとって、悟空への敗北はまるで昨日のことのようであったが、時の流れというものは残酷であり、既に第２３回天下一武道会からは２８年が経過していた。
「お師匠様。悟空さんとお知り合いなんですか？」
「如何にも。この男だ、このワシを二度も破った者は」
「お、お師匠様!!　悟空さんと戦ったことがあったんですか!?」
「３０年近く前の話だがな」
「そっか。おめえがウーブに拳法教えてたんだな」

「最もワシの指導より、貴様との戦いでウーブ君は真の力に目覚めたようだがな」
自分の無力さを痛感しつつも、チャパ王は安堵のため息を吐いた。
ウーブがさらなる高みに達するためには、もはや自分では力不足である。
しかしこの孫悟空ならば、きっとウーブを最強の拳法家に育て上げられるだろうと確信した。
「ウーブ君はワシが達成できなかった最強の男を目指せる逸材、ワシにとってウーブ君は夢そのものなのだ。孫悟空よ、このワシに代わってウーブ君の指導を願えるか？」
まさか悟空に頭を下げる日がくるとは、チャパ王も思っていなかったことだ。
しかしウーブの成長のために、チャパ王は深々と悟空に頭を下げたのだった。
「頭上げてくれよ。オラ元々そのつもりで来たんだ」
「左様か？」
「ああ、任せてくれ!!　どんなやつにも負けねーすげえヤツにするからよ!!」
「まさかあの少年が人にモノを教える立場になろうとは……フッ、これでワシも肩の荷が下りた」
かつて最強だった男から、現在最強の男に受け継がれた意志。
自分の役目は終わった。
しかしこれまでで一番、誇らしい気分にチャパ王はなっていた。
自分がどれほど努力しても勝てなかった孫悟空に、自分の門弟が肉薄し、その孫悟空から指導を受ければウーブはさらなる高みに達することができるだろう。
ひょっとしたら、悟空を超える武道家になれるかもしれない。
これから先、ウーブは悟空たちと共に地球を救う戦士となるが、それはまた別のお話――。

サタン世界チャンピオンへの道!!　第２４回天下一武道会～前編～

天下一武道会。
それはこの世界で行われている３つの武道大会の中でも、特にハイレベルと言われている世界的かつ由緒正しい武道大会であった。
天下一武道会はそのレベルの高さゆえ、優勝者は全員が達人であった。
地獄からの使者、アックマンが過去に二度優勝。さらには当時、その圧倒的な強さから畏怖（いふ）されていたチャパ王が、ただの一度もかすられることなく優勝を果たしている。
そして第２１回天下一武道会。
孫悟空との激闘の末、優勝したのは武天老師が変装したジャッキー・チュンだった。
続く第２２回天下一武道会では、天津飯が鼻の差で悟空に勝利し、優勝。
第２３回天下一武道会では孫悟空とピッコロの大決戦の末、悟空が初優勝を果たした。
――これ以降、天下一武道会は１０年以上も開催されることはなかった。
理由は単純。
天下一武道会の会場があるパパイア島が、ピッコロの超爆裂魔波（ちょうばくれつまは）によって、全ての建物が消し飛んでしまったからである。
その復興に１０年の歳月がかかってしまったが、エイジ７６７年、遂に第２４回天下一武道会が開催されることになった。
「皆様、大変お待たせいたしました!!　天下一武道会が１１年ぶりに復活!!」
金髪にサングラスのスーツ姿の、中年に差し掛かろうとする男。
あの名物アナウンサーも引き続き、審判を兼任して続投することになった。

「皆様、１１年前の戦いを覚えているでしょうか？　孫悟空選手ｖｓマジュニア選手の会場一帯を吹き飛ばすほどの激闘を制し、天下一を取ったのは孫悟空選手!!　今大会には残念ながら出場されていませんが、果たしてあの時の感動を超える戦いがあるのか、私は非常に楽しみです!!」

１１年も経つと、人々の記憶から悟空たちは忘れ去られてしまっていた。

第２３回天下一武道会でマジュニアがピッコロ大魔王の生まれ変わりだと判明し、観客の大半が逃げてしまったことも大きく影響しているだろう。

悟空とピッコロの戦いは、テレビでも途中までしか放映されていなかった。

だから会場の観客たちは誰一人として悟空達を知らない。

しかし悟空達を長年、間近で見ていたこのアナウンサーの記憶には、あの戦いの記憶が鮮明に残っていた。

だからなのか、彼は内心、今大会にはさほどの期待を持っていなかった。

「ミスターサタン選手対スポポビッチ選手!!」

両雄（りょうゆう）が武舞台に上がる。

カーリーヘアーのアクションスターのような風貌の男と、赤茶髪のロンゲの巨漢だった。

「ご存知ミスターサタン選手は天下一武道会以外の二つの世界選手権で優勝経験があります、注目の強豪選手です!!　対するスポポビッチ選手は格闘技界期待の新人。どちらも今大会が初出場、注目の対決です!!」

第２４回天下一武道会は８名によるトーナメント制。

その第一試合に上がったのは、後に世界の救世主となるあの男だった。

「スポポビッチ君、残念だが君は私には勝てない」

人差し指を振りながら、ミスターサタンはスポポビッチを挑発する。

「なにを～、ふざけんな!!」
挑発で怒り狂ったスポポビッチは、ミスターサタンに突撃して殴りかかる。
凄まじい殴打の連撃だったが、サタンはそれを全て軽々と躱した。
「おらぁ!!　……うわあっっ」
渾身の力を込めた大振りのパンチだったが、ミスターサタンは華麗に宙(ちゅう)を舞ってスポホビッチの攻撃を避けたため、空振りで勢い余ったスポポビッチは前のめりに倒れ込んでしまう。
「スポポビッチ選手、凄まじい猛攻でしたが、サタン選手はそれを全て避けてしまいました!!」
「くっそぉ……」
「とりゃあああああーーーーーーッ!!」
掛け声と共に、ミスターサタンは大きく飛び上がった。
胴廻し回転蹴り。それは空手における大技であり、転倒のダメージが残るスポポビッチを仕留めるには威力抜群の絶好の大技であった。
慌てて振り返るスポホビッチだったが、反応が間に合わず、後頭部にモロにサタンの蹴りを食らってしまった。
武舞台に沈むスポポビッチ。
起き上がることはできなかった。
「……9……10!!　ミスターサタン選手の勝ちです!!」
「うおおおおおおおおーーーッ!!」
「格闘王の強さは本物でした!!　強――――い!!　ミスターサタン選手、アッサリとスポポビッチ選手を下してしまいました!!」
高らかに雄たけびを上げ続けるミスターサタン。
まさか7年後の第25回大会で、スポポビッチが愛娘を執拗に痛めつけてしまうことなど、この時のサタンは知る由もなかった。
「ミスターサタンか……流石だな」
「あのスポポビッチをアッサリ倒すとは、優勝候補の一人だろうな」
そうサタンの戦闘力を推測する長い金髪の端正な容姿の男と、鍛え抜かれた肉体を持つ黒人。
それは後の第25回大会にも参加する、ジュエールとキーラであっ

た。
「さあて、第二回戦の始まりだぜ？」
「俺の出番だな……これに勝ってミスターサタンに挑戦してみたいものだぜ」
武者震いをしながら拳を叩き合わせて、キーラは武舞台へと向かった。
「まもなく第2試合が始まります。キーラ選手対ウパ選手」
キーラと対峙するのは、民族衣装に身を纏った褐色肌の若き青年。
長い黒髪を後ろで編んだ青年は、かつて桃白白（タオパイパイ）に父を殺され、父を生き返らせるために孫悟空と冒険を共にした聖地カリンの幼き少年だった。
２０代になったウパは父親ほどではないにしろ背は伸び、よく鍛えられた引き締まった肉体の好青年に育っていた。
聖地カリンでの生活に不自由はない。
ウパ自身、生涯の伴侶と子宝にも恵まれている。
しかしウパには、ある想いがあった。
（悟空さん……僕はあれから父上に稽古をつけてもらい、カリン塔にも上った。今一度、あなたに会えるなら是非お手合わせを願いたい。そのためにはまず、僕が強くなったところを見てもらわなくては……ッ!!）
聖地カリンを守る者として、ウパは父・ボラとの過酷な稽古に励んだ。
そして１７歳になった時、ウパはカリン塔への登頂を果たした。
さらに3年間、カリンとの修行によって超聖水の奪取に成功し、その戦闘力は武天老師に肉薄する１４０ほどに向上していた。
実力的には今大会、最強の参加選手といえる。
「キーラ選手は軍隊出身、特技はマーシャルアーツだそうです!!　対するウパ選手は全くの無名。果たして勝負の行方はどうなることでしょうか……では初めてください!!」
ウパとキーラが睨み合い、お互いに構えを取る。
ウパはボラから基礎を学び、そしてカリン塔でウパに稽古をつけた

のはカリン様とヤジロベーであった。
ゆえにウパの戦闘スタイルは、ヤジロベーの剣術からヒントを得ていた。
（一撃必殺……拳法とは、居合のように一瞬で終わらせること）
民族衣装のズボンの懐に、ウパは両手を突っ込んだ。
「この野郎……ナメやがって!!」
その様子がキーラの目には見下しているように映ったのか、キーラはボクシングの構えで軽快なフットワークを刻み、ウパとの間合いを詰めていく。
そして素早いジャブを浴びせようとするが、あっさりと躱されてしまった。
「なに――――ぐはっ!?」
一閃。
ウパのポケットから飛び出した狐拳（こけん）が、正確にキーラの顎を撃ち抜いた。
「しょ、勝負あり!! ウパ選手の勝ちです!!」
両手を合わせ、ウパは気絶して白目を剥いたキーラに一礼をする。
「これは強い!! ウパ選手、想像を上回る圧倒的な強さで、軍隊上がりのキーラ選手をたったの一発で倒してしまいました!!」
これにはアナウンサーも感激であった。
（いやあ、素晴らしい。彼は強い……天下一武道会の参加者はこうでなくっちゃ!!）
一方で、ウパの存在を警戒する者もいた。
（あわわわわ。ななな、なんということだ……あいつはヤバいぞ!?）
それは一回戦でスポポビッチを破ったミスターサタンだった。
彼は内心、かなり焦っていた。
何故なら今の動きを見る限り、ウパは確実に自身より実力が上だったからだ。
（あの身のこなし……あの時のワケわからんヤツと被るぞ!!）

◇　◇　◇

ミスターサタンには苦い思い出があった。
それは修業時代、彼がサタンの城という道場に通い、師匠の下で格闘技の稽古をしていた頃の話。
サイヤ人との戦いが終わった直後くらいの頃だった。
「師匠。結局、サイヤ人ってなんだったんでしょうか？」
「ははは っ、トリックじゃトリック!! ピッコロ大魔王もそうやって天下を取ったんじゃよ!!」
「は、ははは。なんだ、トリックか。ははははは!!」
若き日の本名マークことミスターサタンは、サタンの城の中でも飛びぬけた才能の持ち主であり、その強さから世界選手権に初優勝を果たした。
そして巷ではミスターサタンと呼ばれ、有名になり始めていた。
そんなある日、遠征先の南の都の酒場で、サタンは師匠と祝勝会を開催して酒盛りをしていた。
そんなめでたい日に、事件は起こったのである。
「はぁーっはははは!! いやー愉快じゃのう我が弟よ!!」
「天津飯とチャオズ、それにピッコロ大魔王まで死ぬとはまさに最高の気分だ」
「いひひひ。天のヤツ、ワシの言った通りロクな死に方せんかったな」
「風の噂では孫悟空も去年死んだらしい。これで我々の邪魔をするヤツはいませんな」
不意に耳に入ってきたのは、鶴の帽子を被った老人と、何故か頭部が機械化されたよくわからない男の会話だった。
「おい見ろマーク!! なんだアレは、三つ編みじゃ三つ編み!!」
「頭が機械なのもウケますね!!」
それを聞いた桃色の衣装に身を包んだサイボーグ男は、静かに立ち上がった。
「なんだ？ 君、世界選手権王者のこのミスターサタンに何か用かね？」
「ワシはその師匠じゃぞ!? 文句があるならお話しようか、奇抜な髪

のオッサン!!」
　それを聞いてもなお、サイボーグ男は何も喋らない。
「おいおい、何か言ってもらわなければ困るよ？」
「ほーれ、口開けてやろうか？」
　サタンの師匠がサイボーグ男の口に手を伸ばした瞬間だった。
「……へ？」
　ぼとん、と師匠の右手が床に落とされた。
　サイボーグ男が放った手刀により、なんと師匠の腕が切り落とされたのだ。
「ぎゃあああああああああああッ!!　──ッ!?」
　あまりの激痛に師匠は手首を押さえて絶叫するが、その絶叫はすぐに止まった。
　なぜならサイボーグ男の舌が深々と、師匠のこめかみに刺さっていたからだった。
「な、ななな、なっ!?」
　目の前で師匠を惨殺されたサタンは、あまりにも突然すぎる出来事に完全に狼狽えていた。
「キサマにいいことを教えてやろう。私は世界一の殺し屋、桃白白（タオパイパイ）だじょーん」
　それからしばらく、サタンにとっては地獄の時間だった。
　桃白白とついでに鶴仙人から長時間拷問にかけられ、瀕死の重体の状態で道端に捨てられ、翌朝になって虫の息だったサタンは通行人に救出され、救急車で病院に送られることとなった。
　なんとか一命を取り留め、病院で意識を取り戻したサタンは固く誓った。
（こ、これからはワケのわからん相手とは絶対に戦わんぞ……）
　こうして現在のミスターサタンの人格が形成されたのだった。
　メチャクチャ強そうなヤツとは絶対に戦わないという、現在の人柄が。

◇　◇　◇

「さあ第三試合です!!　ジュエール選手対マイティマスク選手!!」
　若く、カンフースーツに身を包んだ金髪の男と、謎の青い被り物をした道着姿の男が入場する。
「ジュエール選手は名門多林寺(おうりんじ)で修行し、各地の格闘大会で入賞する実力派のカンフー使い。女性人気ナンバー1の格闘家です!!　対するマイティマスク選手は謎の覆面レスラーとして、プロレス界で台頭してきています。期待の新人同士、注目の対決です!!」
　観客席から黄色い声が上がった。
「きゃあーーーーーっ!!」
「ジュエール様ーーーーっ!!」
　もちろんそれはマイティマスクに対してではなく、全てジュエールに対するものだった。
「くっそぉ、お前をギッタンギッタンに倒して恥をかかせてやる」
「フフフ、それはどうかな?」
「では、始めてください!!」
　ゴングが鳴る。
　しかし試合はあまりにも一方的な結果に終わってしまった。
「……10!!　ジュエール選手の勝ちです!!」
　ジュエールはマイティマスクのラリアットを躱して、カンフーで言うところの寸勁(すんけい)を背中に放ち、マイティマスクがふらついたところに追撃の飛び蹴りを浴びせ、一瞬の間にマイティマスクを下したのであった。
「君は寺のむさ苦しい男たちと同じだったよ。だから負けたのさ」
　実力でも人気でも敗北した。
　これはマイティマスクにとっては最大の屈辱であった。
「続いて第四試合。ブルーザ・プー選手対プンター選手!!」
　アラジンのような風貌の巨漢と、どこかで見たことある俳優のような風貌の男だった。
「プンター選手は格闘選手権でもお馴染み、残虐ファイトの悪役レスラーです!!　対するブルーザ・プー選手はその昔、第21回天下一武

道会の予選に挑戦されたそうですが、惜しくも予選で敗れてしまった苦い思い出があるそうです。悲願の本戦出場、果たして結果を残せるのか!!」

第四回戦。

この試合は序盤こそブルーザ・プーが猛攻を仕掛けたものの、タフさが売りのプンターに掴まってしまい、形勢逆転。散々サンドバックにされた挙句、敗北してしまった。

「す、ストップ!! ストーーーップ!! 勝者、プンター選手!!」

「やめてください!!」

「プー選手が死んでしまいます!!」

「ワハハハハハッ!! この調子でジュエールとか吹かしたヤツもぶっ倒してやるぜ!!」

数人がかりでようやくプンターの暴走が止まった。

ブルーザ・プーはかつて天下一武道会の予選にて、クリリンに破れた苦い思い出がある。

悲願の本戦出場を果たしたものの、怪力プンターの前に惜しくも敗れてしまった。

「ここで武舞台の清掃と点検を兼ねまして、二時間の小休憩させていただき、その後は準決勝第一試合、ミスターサタン選手対ウパ選手となります!!」

観客が歓声を上げる中、サタンは一人、控室で冷や汗を流して震えていた。

(まずいまずいまずいまずい!! まさかあのウパという者、桃白白の弟子じゃあるまいな!?)

果たしてミスターサタンは、聖地カリン最強の戦士・ウパに勝てるのであろうか。

サタン世界チャンピオンへの道!!　第２４回天下一武道会～後編～

（二時間か……今のうちに食事を済ませておくか）
控室で思い立ったウパは、食堂へと向かった。
思えば聖地カリンを飛び立ってから、精神統一を続けていたため今まで何も食べていない。
流石に空腹を覚えたため、今のうちに食事を済ませておこうと考えたのだ。
「ジュエールさまあああ!!」
「サインください!!」
「僕を取り合わないで。さあ、順番にサインを書いてあげるよ」
一方、ジュエールは女性ファンたちに囲まれ、そのファンサービスとして一人ずつ丁寧にサインを書いていた。
そんなジュエールの前に、一人の巨漢が現れる。
「へへへ!!　おいジュエール、女の前でいい顔できるのも今のうちだぞ!?」
「君は……次の試合でボクにやられるプンター君だね？」
「その減らず口、試合で叩けなくしてやるぜ!!」
「いいよ。ボクの拳法に勝てるヤツなど、この世には存在しないんだ」
二人の闘気（とうき）が炎のようにメラメラとぶつかり合う。
どちらもこの時代の格闘技界では有名かつ実力派の武道家であり、ゆえにお互いがお互いを邪魔な存在だと思っていた。
それから二時間が経って、ようやく準決勝第一試合が始まろうとした時、事件は起きた。
「えー、ここで皆様にお知らせ致します。準決勝第一試合にてミスターサタン選手と対戦定のウパ選手ですが、さきほど食中毒により病院へ搬送されたとのことです。従いまして準決勝第一試合はミスターサタン選手の不戦勝となります!!」
なんと、ウパが小腹を満たすために摂った食事が裏目に出てしまっ

たのだ。
（いててててて。な、なんてことだ……まさか、こんな形で試合に出られなくなるとは!!）
これもまた、サタンがチャンピオンになれた原因の一つであった。
実力的には常識の範囲内では強者に入るミスターサタンだったが、明らかに彼よりも実力は上であろう人間はこの世に沢山存在する。
それはクリリンやヤムチャはもちろんのこと、過去の参加者と比較しても、サタンが勝てそうな相手は、せいぜいランファンと男狼くらいのものであろう。あるいは体臭に耐えることができればバクテリアンにも勝てるかもしれない。
つまり、ミスターサタンの素の実力とはその程度なのだ。
ナムやギランはおろか、パンプットにも及ばない、本当に普通の人よりちょっと強い程度。
それなのに何故サタンが世界大会を制してきたのか。
──それはサタンが並外れた強運の持ち主だったからだ。
加えて桃白白との戦いから得た教訓によって、自分に勝ち目のない勝負は仮病などを使って逃れてきた経緯もある。
今回もサタンは、殆ど奇跡のような勝ちを得たということである。
（な、なんだかよくわからんが、とにかく私は生き残れたぞ!!　ジュエールかプンター、どっちが勝ってもアイツらなら恐らくなんとかなるぞ!!）
ミスターサタンは調子を取り戻していた。
最大の難関であるウパには戦う事なく勝利したため、残ったジュエールとプンターなら実力で倒せると判断したからだった。
こうして始まった準決勝第二試合。
「それでは、始めてください!!」
ゴングが鳴り、ジュエールは最初から本気で構えた。
「さあ、かかってこいプンター」
「その鬱陶しい笑み、二度と浮かべられなくしてやるぞ!!　はぁーっ!!」
プンターはその巨体に見合わぬ俊敏さを持っていた。

繰り出される連打は威力、スピード共になかなかのものだったが、ジュエールはそれを華麗に受け流していく。
「はっ!!」
そしてジュエールは大地を力強く踏みつけ、飛び上がってプンターの顔面を蹴り、その反動を使ってさらに大きく跳躍。そしてプンターの顔面を踏みつけ続けた。
「ジュエール選手、凄まじい空中殺法です!!」
「くっ、この野郎ォッ!!」
プンターはジュエールの足を掴み、ジュエールを投げ飛ばした。
しかしジュエールは投げ飛ばされた先で綺麗に着地して、突進してくるプンターを待ち構えた。
「おーーーっと!! ジュエール選手、なんとか体勢を立て直しましたが、武舞台ギリギリだ!!」
「きゃあああジュエールさま!!」
「そこにいては危ないわ!! 逃げて!!」

プンターの突進は会場のみんなが思う以上に速かった。
「そのまま場外に押し出してやるぜ!!」
瞬く間に迫るプンター。
しかしジュエールは直前になって微笑んだ。
そしてプンターの体に触れて、受け流すようにプンターの加速を手伝った。
「うわあああああああっ!?」

それがプンターの勢いをつけてしまい、逆に場外へ落とされる結果となってしまった。
「じょ、場外!! プンター選手、落ちてしまいました!! よって決勝進出はジュエール選手です!!」
まさに柔と剛の対決。力が利に破れた結果となった。
勝負の女神は武術としての柔を使ったジュエールに微笑んだ。
「く、クソォ……」

「プンター、君の欠点は力任せなことだよ。力は君のほうが上だった」
そう言いながらジュエールは武舞台から降りて、控室に入ってミスターサタンをすれ違いざまに見つめた。
（このジュエールという男、想像以上にできるようだ……本気でやらねば）
（見てろミスターサタン、このオレがお前を倒して世界チャンピオンになってやる）
そして三十分の休憩を挟んで、遂に第２４回天下一武道会の決勝戦が始まろうとしていた。
「さあいよいよ決勝戦です!!　世界格闘技王ミスターサタン選手対イケメン拳法家ジュエール選手。天下一はどちらか、さあ始めてください!!」
サタン、そしてジュエール、二人は構えたまま数十秒ほど睨み合った。
（流石はミスター・サタン……打ち込む隙がない）
（三大会制覇がかかっておるのだ。こんな優男に負けられるか……ッ!!）
先に仕掛けたのはサタンのほうだった。
殴打を浴びせようとするが、ジュエールはそれを受け止め、カウンターの手刀を放つが、サタンはそれを見事に受け止め、前蹴りを放ったもののジュエールはそれをガードしてみせた。
衝撃で吹っ飛ばされたものの、ジュエールに殆どダメージはない。
「流石にやるね。これほどの手応えは久しくなかったよ」
「ジュエールとやら、結構やるようだがこの私には敵わないぞ!!」
「言ってくれるね。それなら、これはどうかな……ッ!!」
手を回しながらジュエールは構えを取ると、手刀を構えてサタンへと突進する。
「バカめい、正面からきおったな!!」
サタンが反撃のパンチを繰り出す。
しかしジュエールは寸前で脚を止め、高く宙へ舞ったのだ。
「きぃやあああああああああッ!!」

「ぐ、ぬぅ!?」
それはプンターを苦しめた空中殺法。
サタンは受けの中でも最も強靭とされる十字受けにて、なんとかジュエールの攻撃に耐えた。
しかし少しずつだがサタンの受けが崩れ始め、足腰が下がってきた。
(ま、まずい。このままじゃ……破られる!!)
遂にサタンのガードが崩れる。
「これで終わりだ、ミスターサタン!!」
そんなサタンに、すかさずジュエールは強烈な足刀蹴りを浴びせる。
顎を射抜かれたミスターサタンは白目を剥き、その場に倒れ込んでしまった。
「ダウン!! サタン選手、強烈な蹴りを食らってダウンです!! カウントを取ります、1……2……」
アナウンサーがカウントを取り始めると、ジュエールは両手を合わせて一礼した。
「カウントするだけ無駄だよ。僕の蹴りを食らって立てたヤツは、まだいないからね」
「……9……お、おっと!!」
「なんだと……ッ!?」
しかしジュエールは驚愕することになる。
これまで百発百中、必殺の一撃だった自身の足刀蹴りを食らってもなお、サタンはフラフラとした足取りだが立ち上がって構えたのだ。
サタンの強み、それは桁外れの耐久力であった。
(桃白白とかいうヤツの拷問のほうがよっぽど痛かったぜ……)
あの拷問があったからこそジュエールの必殺の一撃を食らっても立ち上がれたし、その後に手加減されていたとはいえ、セルの一撃を食らっても絶命を免れているのだ。
そう、ミスターサタンの耐久力はギャグマンガ並みだった――。
「フフフ、効いたぞ。だがこの私を最も苦しめた者の攻撃に比べれば、

まだ甘い!!」
「小癪な!!　ならばこれはどうだ!!」
ジュエールは飛びかかり、ミスターサタンに閃光のような連撃を浴びせる。
サタンはそれを防御するだけで精一杯だったが、その瞳からはまだ闘志は消えていない。
それでもジュエールの連撃はじわじわとサタンのスタミナを奪っていき、少しずつだがサタンのガードが下がってきた。
サタンの腕が降りた瞬間。
「チェストォー!!」
ジュエールの鋭い突きが、サタンの頬に突き刺さる。
「な、なに!?」
しかしジュエールの腕に感じたのは、サタンからの力だった。
サタンはジュエールの殴打に耐え、首の力だけで拳を押し戻していた。
「どりゃあああああ!!　サタンミラクルスペシャルウルトラスーパーメガトンパンチ!!」
サタンのタフネスに驚愕し、呆気に取られていた一瞬の隙だった。
サタンの剛腕が振るわれ、その拳が深々とジュエールの鼻っ柱を貫く。
サタンの強烈な一撃をモロに食らったジュエールは、意識が飛んだまま仰向けに倒れた。
「サタン選手、起死回生のカウンターだ!!　カウントを取ります!!
ワン、ツー、スリー……」
サタンは息切れを起こし、もはや立っているのもやっとの状態だった。
そんなサタンに幸運が訪れる。
ジュエールは今の一撃で失神したまま、立ち上がることができなかった。
「テン!!　ダウン!!　ジュエール選手、立ち上がれませんでした!!
よって第２４回天下一武道会、優勝はミスターサタン選手!!　悲願の

三大会制覇、伝説的な瞬間です!!」
サタンは、実力で強豪ジュエールを叩きのめした。
明暗を分けたのは、サタンの肉体の頑丈さだった。
「へっ……勝ったの？　……は、はーーーーっははは!!　ナンバーワーーーーン!!」
左手を腰に当て、右手でピースサインをしながらサタンは豪快に叫んだ。
「すごいぞー!!」
「三大会制覇なんて初めて見たぞ!!」
「サーターン!!　サーターン!!」
「うおおおおおおおおおおおお!!」
こうして第２４回天下一武道会は、ミスターサタンの優勝で幕を下ろした。
少年の部ではサタンの愛娘・ビーデルが優勝し、親子優勝を果たしたことも話題となった。

◇　◇　◇

「……なんだべ、コイツ？」
パオズ山の孫悟空の家にて、チチはテレビの前で呆れかえっていた。
「なんでも天下一武道会で優勝した、格闘技の世界チャンピオンらしいだ」
牛魔王が呆気にとられているチチに、サタンの正体を説明する。
「こんなのが優勝するだなんて、レベル低いだなー今の武道会って」
「そりゃあ悟空さや武天老師さまたちが参加してねえだ。こんなもんだべ」
「おっ父（とう）、出ればよかったべ？　優勝間違いなしでねーか」
「病人を差し置いて武道大会なんて出れねーべさ」
「それもそうか……それにしても悟飯ちゃんったら、今頃どこほっつき歩いているだか。宿題もたくさん残っているっていうのに」

ミスターサタンのことなど、チチたちにとってはどうでもよかった。

今は一刻も早く心臓病に犯された悟空が回復し、そして最愛の息子である悟飯が帰ってくることがチチの望みだった。

絶望への反抗!!　誇り高きサイヤ人の王子、ベジータの最期!!

これは悟空達が生きた時代よりも未来の話。
「ご、悟空さ……嘘だ、嘘だべ？」
「お父さん……っ!!」
「孫くん……」
「悟空っ!!」
エイジ７６４年末。
この日、孫悟空はその生涯に突然、幕を下ろすことなってしまった。
ウイルス性の心臓病に肉体を蝕まれ、いくら戦闘で鍛えたサイヤ人の肉体と言えども、病魔には勝つことができなかったのである。
チチ、悟飯、クリリン、ヤムチャ、ブルマ、家族や仲間たちは深い悲しみに暮れることとなる。
そしてもちろん、この男も──。
「か、カカロット……戦闘民族サイヤ人ともあろう者が、心臓病なんかで死にやがって……ッ!!」
拳を力強く握り、全身を震わせていたのは誇り高きサイヤ人の王子──ベジータだった。
「クソッタレがァァァーーーーーーーーッ!!」
その瞬間、ベジータが黄金のオーラに包まれた。
髪は金髪となって逆立ち、瞳はエメラルドグリーンに変色する。
「カカロット……このオレ様との決着もつけないまま死にやがって、くそォォォオオオオッ!!」
そんな自分の変化にも気づかぬまま、ベジータは咆哮し続けていた。
「べ、ベジータさんが……ッ!!」
ベジータの変化に気付いたみんなの中で、いち早く悟飯が反応した。
そんな悟飯の肩に、緑色の逞しい手のひらが置かれた。

「ピッコロさん?」
「孫の死によってやり場のない悲しみと怒りで、目覚めたようだな……スーパーサイヤ人に」
そこでピッコロはこみ上げてくる感情を押し殺しながら、固唾を飲む。
「だが、せっかく孫に並ぶ力を手に入れても、もうベジータは……」
孫悟空とベジータはライバル関係にあった。
初めて戦った時はベジータが圧倒的に優勢だった。だが界王拳という底力を見せつけられ、下級戦士と見下していた悟空の強さを目の当たりに、ベジータのプライドはズタズタに砕かれた。
そしてナメック星での戦いで、ベジータは各段に戦闘力をあげていった。
しかしそれから常に、悟空はベジータの一歩先を歩んでいった。
ギニュー特戦隊を圧倒した時も。
フリーザとの戦いでも。
そしてスーパーサイヤ人への覚醒も。

そして今回――悟空に並ぶ力を得たのは、皮肉にも悟空を失ったことがキッカケだった。

それからしばらくは平和な時を過ごしていった。
ベジータとブルマの間にはトランクスが生まれ、悟飯は学者になるために勉学に励みつつも、ピッコロが悟飯に稽古をつけていた。
クリリンはカメハウスで亀仙人たちと暮らし続け、天津飯とチャオズは修業の旅を続け、ヤムチャはプロ野球選手として巨額の富を得ていた。
しかしこの平和は、まさしく束の間の平和に過ぎなかった。
『緊急事態が発生しました!! 謎の二人組によって北の都が突如、破壊されてしまいました!!』
人造人間17号と、人造人間18号の出現だった。
ドクター・ゲロによって生身の人間をベースに改造された二人は、

ドクター・ゲロを恨んで生みの親である彼を殺害。
そして人間そのものに恨みを抱いた兄妹は、人類を殺戮することで快楽を得ていた。
「おぎゃあ!!　おぎゃあ!!」
「おーよしよしよし……それにしても大変なことが起きたわね。孫くんが生きていれば……」
そうブルマが呟いた瞬間だった。
「……カカロットだと?」
突然、ソファーで寝転がっていたベジータが声をあげたのだった。
「孫くん孫くんって、病気で死にやがった下級戦士のカカロットに何ができる!!」
「ちょっとベジータ!!　そんな言い方ってないじゃない!!」
「うるさい!!　人造人間だかなんだか知らないが、このオレ様がぶっ壊してやる」
そう叫んでベジータは廊下を駆け抜け、外へ飛び出していった。
ブルマはトランクスをたまたま近くにいた使用人に任せ、ベジータを追いかけた。
「ちょっとベジータ待ちなさい!!　アイツら得体が知れない。あんた一人で行くなんて無謀だわ!?　ピッコロたちと一緒に戦うべきよ!!」
ブルマはなにか、嫌な胸騒ぎがしていた。
悟空亡き今、ベジータはこの地球で最強の戦士と言える。
しかし悟空亡き今、そのベジータはさほど修行に身が入っておらず、カプセルコーポレーションで毎日怠惰な生活を送っていた。
最低限のトレーニングはしているため、強くなったわけでも、弱くなったわけでもない。
だが今のベジータはピッコロとさほどレベルは変わらない。
だからこそブルマは保険として、悟空とピッコロがラディッツと戦った時のように、ベジータとピッコロでタッグを組むべきだと考えた。
そうすればきっと、謎の人造人間に勝てると考えた。
――しかし。

「ピッコロだと？　ふん、オレ様は戦闘民族サイヤ人の王子、ベジータ様だ。あんなヤツと組んで戦うくらいなら、一人だけで戦って死んだほうがマシだ!!」
　そう言ってベジータはスーパーサイヤ人に変身し、瞬く間に舞空術で飛んで行ってしまった。
「ちょっとベジータ!!　待ちなさいよ、ベジータ!!　……ベジータ」
　ブルマは遠ざかるベジータの姿を見ながら、一抹の不安を覚える。
　だが、彼女にできることは祈る事だけだった。
　きっとベジータは人造人間を倒し、世界の平和を守ってくれる。
　そう信じるしか、ブルマにはできなかった。

「キサマらか、噂の人造人間とやらは……ククク、なんだガキじゃないか」

　二人の人造人間は北の都を破壊しつくしていた。
　破壊行動を楽しんでいたため、ベジータにあっさりと発見されたのだ。
「なんだいアンタ？　アタシたちに何か用かい？」
「お前は……なるほど、ベジータか」
「ほう、このオレ様を知っているようだな。だったら話は早い、キサマらを破壊してやるぜ」
　そう言ってベジータは気を高めた。
　眩い黄金の光に全身が包まれ、大地が、空気が、大きく揺れ動いた。
「こんなヤツ、さっさと殺しちゃおうよ17号」
「まあ待てよ。こいつの相手はオレにさせてくれよ」
「なんだい。アンタ独り占めするつもりかい？」
「いいだろう？　孫悟空はどうやら死んでしまったらしいからな。この世界じゃこのベジータとピッコロが二大強者ってことだ。オマエにはピッコロのほうを譲ってやるよ」
　ニヤニヤしながら17号は18号の説得をする。
「ふーん、まあいいわ。じゃあそのピッコロってヤツはアタシにやら

せてよ」
「そういうことだ。オマエの相手はオレがしてやるぞ」
「フン。すぐに二人がかりでかかってこなかったことを後悔させてやるぜ。はぁーッ!!」
ベジータは気を高め、１７号目掛けて突進した。
ベジータの殴打を受け止める１７号だが、ベジータは突きや蹴りの嵐を何度も１７号に放つ。
１７号も手足を出して、二人はラッシュの打ち合いをする。
しかしベジータの攻撃を避けた１７号は、ベジータの背中を殴打する。
吹っ飛ばされたベジータを追撃しようと、１７号はとてつもないスピードでベジータに迫ったが、待っていたと言わんばかりにベジータは片手を開いた。
そして手のひらに気を集中して、狙いを１７号に定める。
「喰らえ!!　オレ様の新必殺技、ビッグバンアタァーック!!」
「──ッ!?」
凄まじいエネルギーの塊が手のひらから飛び出し、１７号は動きを止めた。
躱しきれるタイミングではなく、ベジータのビックバンアタックは１７号に直撃する。
「……フン、他愛もなかったな」
ベジータはニヤリと口元を釣り上げた。
「──それはオマエの攻撃のことかな?」
「なに!?」
だが一瞬の喜びに過ぎなかった。
１７号は自分の周囲に緑っぽいオーラを纏い、無傷で手のひらを開いてベジータを見て不敵な笑みを浮かべた。
１７号はバリアで自分の身を守ることができたのだった──。
「なるほど……確かに生身の人間にしては強い。だがオレ達が警戒するほどではないな」
「なんだと!?　キサマ、このベジータ様が警戒するほどではないだと

!? サイヤ人は戦闘種族だ、ナメるなよ!!」
それからベジータは気弾の連射を浴びせた。
何度も何度も、１７号が避けきれないほどの弾幕を張ったつもりだった。
しかし１７号は俊敏に動いて、残像を残しつつ徐々にベジータに迫った。
そして──。
「なにっ!?」
「バーカ」
１７号の鋭いパンチがベジータの腹部にめり込み、それはベジータの背中を盛り上がらせるほどに協力なパンチだった。
呼吸困難に陥り、咳き込むベジータ。
すかさず１７号は強烈な蹴りを叩き込み、ベジータは建物の残骸に叩きつけられた。
「が、はッ!?」
吐血しながら、全身に広がる痛みに苦悶するベジータ。
「どうした、戦闘民族サイヤ人の王子が聞いて呆れるぜ?」
「この野郎……ッ!! ちゃあああああーーーッ!!」
ベジータは再び黄金のオーラをまとい、１７号に向かって飛びかかった。
殴打の連撃を繰り返すが、その全てを見切った１７号は全て躱してしまう。
「ふぉおおっ!?」
そしてベジータの鳩尾に、１７号の膝蹴りがめり込んだ。
「ベジータ、もっと楽しませてくれよ」
指先で顎を持ち上げ、ベジータを挑発する１７号。
その１７号の強さに恐怖を覚えるベジータに対し、１７号は強烈な殴打を顔面に浴びせた。
ぶっ飛ばされたベジータだったが、なんとか空中でとどまった。
口、そして鼻から流れる血液を拭い、純白のグローブが鮮血に染まった。

「ハァ、ハァ、ハァ……このオレが、たかがガラクタ人形ごときに!!」
「どうした、もう終わりか？　だったら殺すけど、いいな？」
「このオレはサイヤ人の王子、ベジータなんだ!!　キサマらガラクタ人形なんぞに、ナメられてたまるかァァーーーーーーーーッ!!」
咆哮するベジータ。
そしてベジータと１７号による、凄まじい打撃戦が始まった。
（力が僅かに増した……データの通り、サイヤ人は感情が高ぶると力が増すのか）
ベジータはプライドを傷つけられ、激しい怒りによって自分でも気づかないうちに気を解放していた。
その結果、さっきまで掠らなかった攻撃が１７号を捉えつつあった。
ベジータの攻撃を１７号は防いだため、一発も届くことはなかったが、確実に避けられる攻撃は減っていた。
サイヤ人の底力に少々関心した１７号だったが、不敵な笑みは崩さなかった。
（だが、たったそれだけのこと。力の差を埋められるほどじゃない――）
そう思いながらベジータと１７号の攻撃が激しくぶつかり合い、少しだけ間合いが離れた瞬間だった。
１７号が両手を合わせ、放ったエネルギー波がベジータに直撃したのだった。
ただのエネルギー波ながら、基礎戦闘力の違いからなのか、その威力はベジータが本気で放つビッグバンアタック以上のものがあった。
地面に叩きつけられ、仰向けに倒れるベジータ。
「くそぉ……ッ!!」
なんとか上体を起こそうとするものの、思うように体が動かない。
（潮時か。まあ、思ったよりは楽しめた……か）
ニヤリと笑い、１７号は全エネルギーを込めたエネルギー波を放った。
「――ッ!?」

閃光に包まれるベジータ。
もはやベジータにはソレを避ける体力など残されていなかった。
エネルギー波を食らい、激しい熱が全身を襲った。
（か、カカロッ……ト）
走馬灯のように蘇る、悟空との戦いの記憶。
（ふ、フフフ……待っていやがれカカロット、必ずキサマを、あの世で倒してみせる――）

誇り高きサイヤ人の王子ベジータ、遂に人造人間17号の前に力尽きる。
死に際に思い浮かべた、悟空の姿。
しかし皮肉なことに、ベジータは死後の世界で悟空と再会することはできない。
これまでたくさんの命を奪ってきた極悪人であるベジータは、魂となって地獄へ送られるのだ。
――戦闘民族サイヤ人の報われない最期であった。

絶望への反抗!!　悟飯にすべてを託して、ピッコロとクリリンの最期の戦い!!

「武天老師様、とんでもないことになりましたよ……」
「わかっておる……ベジータが、ベジータの気が」
ベジータの気が一気に膨張し、そして完全に消滅したことに、戦士たちは気づいていた。
「ウソだろ……ベジータのヤツ、ブルマを残してやられちまったのか!?」
戦士たちは各々、ベジータの死について心情を吐露していた。
「天さん……」
「それにしてもベジータを殺ったヤツは何者なんだ」
悟空亡き今、最強の戦士と思われるスーパーサイヤ人ベジータが破れた。
それはベジータに対する個人的な感情を抜きにしても、戦士たちにとっては衝撃的な出来事であり、何よりそれほどの脅威が地球に存在することを思い知らされた。
それはもちろん、パオズ山で修行をしていた悟飯とピッコロも同様だった。
「そんな……ベジータさんの気が」
「あのベジータを殺すとは、とんでもないヤツが地球に現れたものだ」
「ピッコロさん、一体何者なんでしょうか?」
「そりゃあおみゃあ、人造人間の仕業だがや!!」
突然の大声に、悟飯とピッコロが反応して振り返る。
そこにはクルマから降りて、ふてぶてしい表情で佇むヤジロベーの姿があった。
「ヤジロベーさん!!」
「どういうことだ、説明しろ」
「オレもカリン様から聞いただけだがよ、人造人間っちゅーヤツらが北の都で暴れてよ、ソイツらどえりゃー強くてな、ベジータのヤツは

アッサリ殺されちまったよ」
ヤジロベーの言葉には信憑性があった。
彼が暮らすカリン塔には、カリンという猫の姿をした仙人がいる。
カリンは下界の様子を探ることができるため、カリンを通じてヤジロベーは大方の事情を把握していた。
そのことを悟飯もピッコロも知っていたため、ヤジロベーの説明を真に受けて拳を握り締めた。
「人造人間だと……ソイツらということは、複数いやがるのか？」
「人造人間は二人だがや。ベジータを殺した後も、ヤツらは破壊を楽しんどる」
「人造人間……街を、人を、破壊しまくっているだなんて……なんとかしなきゃ!!」
悟空が病気で死に、ベジータが人造人間との戦いに敗れ、戦死した。
そして人造人間は破壊と殺戮を楽しんでいる。
そんな現状を聞いて、悟飯の心の中では正義感が燃え上がっていた。
「待て悟飯。ベジータがやられるほどの相手だ……無策でぶつかってもオレ達に勝ち目はない」
「そんな!!　それじゃあ僕たちはどうすれば……」
「勝てる可能性があるとすれば、オレとお前が強力な一撃をヤツらに与えること。だが二人の人造人間がベジータを上回るとするなら、オレたち二人ではとても無理だろう」
しかしピッコロは考えていた。
ベジータに匹敵する自分はもとより、自分達以上の力を秘め、その潜在能力は父である孫悟空を超える悟飯の底力であれば、もしかしたら人造人間を出し抜けるかもしれないと。
そのためには人数が必要であると。
「悟飯、お前はヤジロベーとカメハウスへ向かえ。クリリンもそこにいるだろうしな」
「ピッコロさんは？」
「オレは天津飯とチャオズ、そしてヤムチャを探してくる……」

彼らは自分たちより実力的には劣るものの、特にクリリンは戦闘経験が豊富でトリッキーな戦術が得意であり、格上相手に立ち回れるずる賢さと身のこなしがある。
天津飯には気功砲という必殺技があり、格上にも通用する威力を秘めている。
ヤムチャとチャオズは……作戦の成功には頭数が多いほうがいいだろうと、ピッコロは考えた。
――こうしてピッコロはその日のうちに全員を集め、カメハウスで作戦会議が行われた。
「なんだよピッコロ、人造人間を倒す作戦っていうのは」
クリリンが質問をすると、ピッコロは瞑っていた瞳を開けた。
「二人の人造人間は、どうやらベジータを超える力を持っているらしい」
「おいおい、そんなヤツをオレたちが倒せるのかよ？」
ヤムチャは全身の毛が逆立つような恐怖を覚えながら、ピッコロにそう質問した。
「お前たちはもとより、オレでも無理だろう。だが一つだけ手がある」
「その手ってのはなんだ、ピッコロ。もったいぶらずに教えろ」
天津飯がピッコロに説明を求める。
「オレの魔貫光殺砲（まかんこうさつぽう）は、相手のほうが強くても多少のことなら通用する技だ。悟飯もオレとの修行でそれを会得している。悟飯の魔貫光殺砲でヤツらを貫く作戦だ。だが最大パワーの魔貫光殺砲は気を溜めるのにやたら時間がかかる。お前たちにはオレと共に、ヤツらを足止めして欲しい」
かつてナッパとの戦いにおいて、ピッコロがクリリンと悟飯に指示した作戦とほぼ同一の作戦だった。
あの頃は悟飯の未熟さと、ナッパの凄まじい戦闘力を前に失敗している。
しかしサイヤ人やフリーザとの戦いを経て、悟飯は肉体的にも精神的にも見違えるほどに成長している。
クリリン、ヤムチャ、天津飯、チャオズの四人では、人造人間には

歯が立たないだろう。
そこに自分が加われば、二人の人造人間を相手になんとか立ち回れる。
人造人間を直接見たわけではないが、ヤジロベーから聞かされたベジータの戦いぶりから、殺されない程度には持ちこたえられるのではないかと推測した。
そう考えた理由は単純だ。
ピッコロはベジータの気から、ベジータの実力を察していたのだ。
――気の大きさは今の自分とさほど変わらないことを。
つまり今の自分は、ベジータとほぼ同等の実力があると考えていた。
「オレたちが、足止めか……サイヤ人との戦いを思い出すな」
「だけどクリリン、相手はベジータより強いんだぜ？　そんなことできるのかよ」
「だがピッコロの言うことは一理ある。今ヤツらを倒せる可能性があるのは、悟飯とピッコロしかいないのだからな」
天津飯とクリリンは覚悟を決めていた。
「ボク、戦うよ。天さんの役に立ちたい」
チャオズも天津飯と運命を共にする覚悟だった。
「天津飯、クリリン、チャオズ……しょうがねーな、オレもやってやるぜ!!」
「ああ、やるだけやってみよう。ピッコロも一緒に戦ってくれることだしな!!」
「決まりのようだな。では作戦は明日だ……せいぜい英気を養っておけ」
ピッコロの一言によってその日は解散となり、戦士たちは来るべき決戦に備えて休養をとった。
また天津飯とチャオズのように、修行をして決戦に備える者たちもいた。
ちなみに情報を伝達してきたヤジロベーはというと……。
「オレは闘わねーぞ!!　この世が滅びる前にうんみゃーモノ食うんだ

!!」
いつものように戦いを拒むのであった。
そして亀仙人はというと。
「ワシがいてもお荷物になるだけじゃろう。悔しいが、お主たちからの吉報を待っておる」
己の無力さを痛感しつつ、ピッコロたちが人造人間を倒すことを祈っていた。
──翌朝。
戦士たちは集合した後、人造人間が暴れているという北東方面へと向かった。
そしてカメハウスでは亀仙人とウーロン、そしてプーアルが戦士たちの健闘を祈っていた。
そんな時、一機の飛行機が降り立った。
「お、お主……」
それは黒い喪服に身を包んだブルマであった。
「ブルマよ、お主……大丈夫なのか?」
「ええ……一晩中泣いてたら少し落ち着いたわ」
よく見るとブルマの目元は赤く腫れあがっていた。
殆ど家族を顧みなかったものの、それでも最愛だった夫を失った辛さを物語っていた。
「おいおい、葬式中なんだろ?　いいのかよ抜け出してきて?」
「葬式は明日よ。葬式といっても、ベジータの遺体なんて無いんだけどね……」
そう呟くブルマの瞳から、また涙がこぼれ始めていた。
「ブルマさん、これ使ってください」
プーアルがブルマにハンカチを渡した。
「ありがとう、プーアル……ううっ」
「それでブルマよ、ワシに何か用かの?」
「ええ、昨日ヤムチャから聞いたわ。今日、みんな人造人間と戦いに行くってね」
「なるほどの……」

一人で祈りより、みんなで祈りたい。
ブルマの心境としては、そんなところだろうと亀仙人は察したのだった。

◇　◇　◇

「これはこれは……揃いも揃って、大名行列のようだな」
「なんだいアンタたちは？　鬱陶しいんだよ……全員殺すよ？」
人造人間１７号は不敵な笑みを浮かべ、人造人間１８号は不快そうに啖呵を切った。
そんな二人の前で、ピッコロら戦士たちは構えをとっていた。
「ほざけ……死ぬのはキサマらのほうだ」
「ピッコロ大魔王ごときが何を言っている？　……よし１８号、オマエにピッコロを任せよう」
「アンタはどうするんだい？」
「その他大勢と遊んでやる。５対１だ、少しはゲームらしくなるだろう？」
「アンタは遊び好きね。まあいいわ、遊んであげるよ……ピッコロ大魔王」
戦いの火蓋は、ピッコロが放ったエネルギー波によって切って落とされた。
１７号と１８号は二人は二手に分かれ、１８号がピッコロを襲った。
「たぁっ!!　たたたたたぁ!!　じゅうえんッ!!」
激しくぶつかり合うピッコロと１８号。
ベジータと同等の戦闘力を有するだけあって、ピッコロは１８号を相手に引けを取らぬ戦いぶりを見せた。
そして１７号はクリリンたちへと襲い掛かる。
「悟飯!!　お前は作戦通り、退避して気を溜めるんだ!!」
「はい!!」
悟飯は返事した後、飛び退いて物陰に隠れ、人差し指と中指を額に

当てて気を溜め始めた。
ピッコロ直伝、魔貫光殺砲である。
「頼んだぜ悟飯……よし、みんな行くぞ!!」
「狼牙風風拳、久しぶりにお見舞いしてやるぜ!!」
「行くぞ、チャオズ!!」
「はい、天さん!!」
17号を相手に、四人は果敢に飛び込んでいった。
しかしそれは地獄の幕開けであった。
「ぐはっ!?」
17号の戦闘力は圧倒的だった。
クリリン、ヤムチャ、天津飯、チャオズの四人で束になっても、まるで歯が立たなかった。
少しはマシな戦いができるかと四人は思っていたが、17号の強大な力を前に四人は一方的に弄ばれてしまう。
──そして遂に悲劇は訪れた。
「そんな、ボクの超能力が効かない……ッ!!」
「鬱陶しいガキだ。ふんっ!!」
17号が放ったエネルギー波によって、チャオズは跡形もなく消し飛んでしまった。
「そんな。ちゃ、チャオズが……やられちまった」
チャオズだった残りカスが降り注ぐ中、クリリンは青ざめた表情でその方向を見つめた。
「チャオズ!!　……おのれ、許さん!!　絶対に許さんぞ、キサマァーッ!!」
「おい天津飯!!　待て、一人じゃ無理だ!!」
チャオズを殺されたことにより、怒り狂って突撃する天津飯。
そんな天津飯を援護しようと、ヤムチャも一歩遅れて飛びかかった。
しかし──。
「うるさい!!」
「──ッ!?」

１７号のエネルギー波が、天津飯の腹部を貫いた。
「が、は……ッ」
天津飯は薄れる意識の中、ヤムチャが立ち向かうのを見る。
それが天津飯が生涯、最期に見た光景だった。
「くっそぉぉぉ!!　よくも天津飯を……特大の操気弾だッッッ!!」
ヤムチャは右手から気の弾を出し、それを手の動きに合わせて操作した。
これがヤムチャの切り札、神様をも驚かせた操気弾である。
何度か１７号を横切る気弾。
それには一切目を向けず、１７号は涼しい顔でヤムチャを見つめ続けた。
「はあああああ!!　たりゃあ!!」
操気弾は１７号に直撃し、激しい爆発を起こした。
爆風を身に浴びて、クリリンは腕で顔面を覆った。
──しかし。
「ご、ぉあっ!?」
──次の瞬間、ヤムチャの胸をエネルギー波が貫いていた。
「あ、ああ……そんな、ヤムチャさんまで……っっっ」
爆炎の中から姿を現す、手を張り出した１７号。
不敵な笑みのままクリリンを見下していた。
「とうとうオマエ一人になってしまったな?」
（クソッ!!　みんなやられちまった……どうする?　オレなんかが勝てる相手じゃない!!）
クリリンは腰を落として構えを取りながらも、冷や汗を流して歯を噛み締めていた。
横目で１８号とピッコロの戦いを見る。
「うふふ、そろそろスタミナが切れてきたようね」
「ハァ、ハァ、ハァ……くそ、化け物め!!」
１８号は一切疲れを見せていないが、ピッコロは息を切らし始めていた。
（まずい、このままじゃ全滅してしまう……なんとかしないと!!）

クリリンは焦っていた。
そして必死になって策を練ろうと、頭で色々と考えていた。
しかし戦闘経験豊富な彼をもってしても、何をどう頭を捻っても、17号に対して有効な攻撃を浴びられるビジョンが見えない。
それでも17号をなんとか躱して、ピッコロを援護しなくてはまずいと思った。
(ドラゴンボールさえあればナメック星に行ける……それで殺されたみんなは生き返るんだ。だからピッコロは、ピッコロだけは死なせちゃいけない!!)
クリリンは覚悟を決めた。
なんとか17号の動きを封じ、ピッコロに加勢をする覚悟を。
「どうやら覚悟はできたようだな。それじゃ、死んでしまえ――」
17号は猛スピードでクリリンに接近してくれ。
(しめた……アイツ、一直線に飛び込んでくれた!!)
クリリンと17号の実力差は明白である。
しかし経験豊富なクリリンは、これをチャンスだと捉えた。
何故なら、あの技が有効な状況だからだ。
そしてそろそろ悟飯の気も溜まる頃合い。
17号の動きを封じ、ピッコロに加勢し、そして悟飯が17号に攻撃する最大にして最後のチャンス。
開いた手のひらを頭の横に、クリリンは腰を落として目を瞑った。
「食らえッ!! 太陽拳!!」
刹那、眩い閃光に大地が包まれた。
「うわっ、なんだ!?」
突然、視界を奪われた17号は、ただひたすら目を覆うことしかできなかった。
「今だ悟飯!! やれーーーーーーーーーーーっ!!」
そう叫んでクリリンは気を解放し、17号の前から戦線離脱。
一直線に飛んで、ピッコロと18号に近づいていく。
「もうつまんないね……これで終わらせるよ!!」
「クソ、ここまでか……ッ!?」

ピッコロはかなり疲弊していた。
息を切らし、１８号の猛攻になんとか耐えていたが、いよいよ限界が近づいていた。
ベジータとさほどレベルが変わらない手前、ピッコロ単独では１７号に匹敵する１８号には勝ち目などないのである。
しかし１８号の背筋が凍る。
嫌な予感を感じた１８号は空を舞い、ソレを間一髪で避けた。
円形の鋭い気の刃が１８号の髪を数本、切断して遠ざかっていく。
「……あの野郎」
ピッコロは思わず口を釣り上げ、表情を明るくした。
「クソッ!!　あと一歩だったのによ……ッ!!」
「なんだいアンタは？　１７号はどうしたんだい？」
「１７号はもうすぐやられるさ……ピッコロ、加勢するぜ？」
「キサマに手助けされる日が来ようとはな……行くぞクリリン!!」
「おう!!」
ピッコロの窮地を救ったクリリンは、そのまま１８号との戦いに加勢する。
そして視力を奪われた１７号だったが、ぼんやりとその視力が回復しようとしていた。
「くそっ、あのハゲ頭……ッ!!」
「食らえ!!　みんなの仇だ……魔貫光殺砲!!」
次の瞬間、物陰から飛び出た悟飯は一点に集めたエネルギーを指先から放出した。
高圧のエネルギーが超高速で１７号に襲い掛かる。
「１７号!!」
それを見た１８号も、思わず１７号の安否を心配して叫んだ。
「クソ……さっきの光で目が見えないっ!!」
「悟飯!!」
ピッコロが叫ぶ。
「やれ、ごはーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーんっ!!」
クリリンが目を瞑り、精いっぱいの声で悟飯に声援を送る。

みんなの期待を込めた、ピッコロ直伝の魔貫光殺砲は、１７号の反射神経をもってしても避けきれるタイミングではなかった。
――しかし魔貫光殺砲は１７号に届かなかった。
１７号は直撃する寸前、バリアの展開に成功したのだった。
１７号のバリアは非常に強力であり、あの二倍以上もの戦闘力に差があったラディッツさえ貫いた魔貫光殺砲を、なんと弾いてしまったのである。
「そんなぁ……ッ!!」
悟飯は情けない声を漏らす。
「ご、悟飯……くそ、通らなかったか!!」
ピッコロが悔しそうに咆哮する。
「そんな。悟飯の気はすさまじかった……マトモに食らってたら、悟空だって危うい技なのに!!」
青ざめた表情で、クリリンは戦慄していた。
「今のは危なかった。マトモに食らっていたら怪我はしていたかもな」
１７号は衣服についた埃を払いながら、悟飯の技を称賛する。
しかしその称賛は三人にとって、全く嬉しくない称賛だった。
ピッコロとクリリンは飛んで悟飯の周りへ降り立ち、悟飯を守るように悟飯の前で構えた。
（悟飯は、悟空の息子だ……サイヤ人だしな、とてつもないパワーを秘めてる）
クリリンは歯を食いしばながら、悟飯をチラ見して考えた。
（今のオレたちにヤツらは倒せない。だが悟飯……あるいはベジータが遺したあのガキなら）
そしてピッコロは窮地に陥って、逆に微笑んでいた。
自分の愛弟子にして孫悟空の息子であり、サイヤ人の血を引く孫悟飯。
そしてベジータとブルマとの間に生まれた、もう一人のサイヤ人の血を引く子――トランクス。
――希望はこの二人だけだと、クリリンとピッコロは同時に思っ

た。
悟空やベジータのようにスーパーサイヤ人に覚醒し、いずれ悟空やベジータを超える超戦士になりえるのは、悟飯とトランクスだけであろう。
だがトランクスはまだ赤子。
悟飯はまだ子供、しかしピッコロたちから戦い方はある程度、学んでいる。
今の悟飯に勝ち目はない。
そして悟飯まで死なせてしまっては、トランクスも戦士として育たない。
――クリリンとピッコロは、覚悟を決めた。
「おいピッコロ。おまえ、悟飯と一緒に逃げろよ」
「バカを言え。キサマ一人では時間も稼げなかろう」
「ピッコロさん、クリリンさん……」
二人の背中を見て、悟飯は不安げに二人の名前を呼ぶ。
「悟飯。オレとピッコロが飛びかかるから、その隙にお前は逃げるんだ。いいな？」
「そんな……二人を見捨てられません!!　ボクも戦います!!」
「悟飯。逃げろ、これは命令だ」
ピッコロが厳しく目を光らせ、それには流石の悟飯も狼狽えた。
「お前は孫悟空の息子だ。そしてサイヤ人の血を引いている……お前は生き延び、スーパーサイヤ人となり、そしてベジータのガキのトランクスを戦士として育て上げ、二人で人造人間を倒すんだ。いいな？
これはオレからの命令だ」
希望をここで消すわけにはいかない。
そんな意志だったが、ピッコロは最後に微笑んだ。
「悟飯……オレと初めてマトモに喋ってくれたのは、お前だけだった。お前のことはたとえ死んでも忘れん。だから生きろ……生きて、平和を勝ち取ってオレたちの仇を取ってみせろ。そして夢を叶え、学者になってオレたちを安心させてくれ……頼んだぞ」
その優しい笑顔を最後に、ピッコロとクリリンは17号と18号に

突撃していった。
「生　き　ろ　よ、　悟　飯!!　　ぅ　お　お　お　お　お　お　お　お　お　おーーーーーーーーーーーっ!!」
「クリリンさん!!」
「行け、悟飯!!　はあああああああーーーーーーーーーーーッ!!」
「ピッコロさん……うわああああああああああああッツツ!!」
その日、悟飯はどうやって家に帰ったのか、全くと言っていいほど記憶になかった。
ただひたすら泣き叫び、大粒の涙を拭いながら、必死になって空を飛んだ。
クリリンとピッコロが、自分の身を犠牲して救ってくれたこの命、決して無駄にしてはいけないという気持ちで、悟飯はひたすら飛び続けたのだ。
決して後ろを見ず、前だけを見て、悟飯は激しい怒りと悲しみに耐えながら飛んだ。
「う、うぅぅう……クリリンさん、ピッコロさん…………うわあああああああっ!!」
その時だった。
悟飯の中で、何かが目覚めたのは。
「許さなあああああーーーいっ!!　人造人間、絶対に許さないぞ!!　うわああぁーーっ!!」
悟飯が黄金に輝いた。
髪が亜麻色に逆立ち、瞳の色まで宝石のように変色した。
━━悟飯はこの日、スーパーサイヤ人に目覚めた。
━━そしてピッコロとクリリンは悟飯を逃がすため、壮絶な戦死を遂げるのだった。

絶望への反抗!!　最後の仙豆を届けよ、ヤジロベーとカリン様の決死の作戦!!

人造人間１７号と人造人間１８号は、あまりにも強かった。
僅か二日間の間にベジータ、ピッコロ、クリリン、ヤムチャ、天津飯、チャオズと、殆どの戦士たちは圧倒的な強さの前に破れ、そして命を落としてしまった。
残された戦士は悟飯と、まだ生まれたばかりの命――ベジータの子・トランクスのみ。
（ピッコロさん……クリリンさん……ヤムチャさん……天津飯さん……チャオズさん……ベジータさん）
パオズ山の奥。洞窟の中にて、悟飯は気を高め、それを一気に解放した。
一瞬だが、悟飯はスーパーサイヤ人に覚醒した。
だが、本当に一瞬。すぐに力尽きてしまい、悟飯は四つん這いになって息を切らした。
「はあ、はあ、はあ……ダメだ。今のままじゃ、スーパーサイヤ人を維持できない」
ピッコロとクリリンの死によって目覚めたスーパーサイヤ人。
しかし悟飯まだスーパーサイヤ人に自在に変身したり、長時間変身することができずにいた。
（もっと、強くならなくちゃ……みんなの仇を討つんだッ!!）
地面を殴り、悟飯は固く誓った。
「お父さん……どうかボクに力をください」
そして悟飯の修行の日々が始まった。
――それから7年。
人造人間は破壊と殺戮をゲーム感覚で楽しんでおり、じわじわとではあるが確実に地球人口は減少しつつあった。
もちろん、人類はただ人造人間に黙ってやられようとしたわけではない。

人造人間に抵抗しようとする者たちはいた。
『国民の皆様、落ち着いてください。二人の人造人間は必ずや王立軍が討伐してみせましょう』
キングキャッスルの国王が軍隊の派遣を決定。
二人の人造人間に対し、軍隊が何度も何度も襲撃を行ったものの、結果は言うまでもない。
軍隊は一年のうちに組織的な戦闘能力を失い、以降は王立軍の残党やレジスタンスによるゲリラ戦が中心となった。
もちろん、腕に覚えのある達人たちも人造人間討伐に名乗りを上げた。
「聞けーい!! この格闘技世界チャンピオン、ミスターサタンが人造人間などとふざけた野郎どもを破壊してくれるわい!!」
ミスターサタンも立ち上がった。
軍隊が壊滅した今、第２４回天下一武道会を含めた三大会制覇という快挙を果たした、サタンが人類にとって最後の頼みの綱であった。
この宣言の後、サタンは人造人間の討伐へと向かった。
――以降、サタンは消息不明となってしまう。
サタン以外にも襲撃された地域の達人たちが、人造人間に立ち向かっていった。
「このギランさまをナメるなよ!! グルグルガムを食らってみろ!!」
「フン、これがどうしたというんだ?」
「鬱陶しいんだよ、この怪獣野郎が」
「ギィエエエエエエエエッ!!」
かつて天下一武道会で孫悟空と戦ったギランが殺された。
「この私がどうにか時間を稼いで見せる……受けてみよ、天空×字拳(てんくうぺけじけん)を!!」
「意味のないことを……波っ!!」
「無念――ッ!?」
ナムも、村を守ろうと立ち向かったが、敵うはずもなく一瞬で消滅させられてしまった。
人造人間は、あまりにも強すぎたのだった。

ピッコロやベジータでも勝てない二人に、もはや地球人類など成す術もなかったのである。
――こうして7年間の間に、およそ達人と言われる地球人類はほぼ消滅していた。
せいぜい戦闘力の高い人類はカメハウスを離れ、潜水艦の中で生き延びていた武天老師と、襲撃を受けていないパオズ山のチチや牛魔王、コソコソと物陰に隠れて生き残った鶴仙人と桃白白くらいである。
レジスタンスによる抵抗活動は続いていたが、結果は虚しいものだった。
「もっと張り合いのあるやつらはいないのかい？」
「どうやらピッコロやベジータ達以外に、面白そうな戦士はいないみたいだな」
「もういっそのこと、さっさと全員殺しちゃおうよ、１７号」
「まあ慌てるなって。人間の恐怖に引き攣る顔が面白いんだろ？　じわじわと時間をかけて、人間が恐怖に怯える姿を楽しみながら絶滅させていこう」
この時点で地球人類の人口は全体の7割ほどに減少していた。
しかし人造人間の戦闘力からすれば、進行は遅いほうである。
これは特に１７号の意思によって、ゲーム感覚で人殺しをしていたためである。
彼らは恐怖に引き攣る人間の顔を楽しんでいたのだ。
「それにしても、もうこの街には人類は生き残っていないようだな」
「最後にド派手に花火にしちゃおうよ、１７号」
「そうだな。この街、最後の輝きということにしてしまおう」
そう言って二人は空高く飛び、二人は手のひらを壊滅した街へと向けた。
エネルギーを込めて、完全に都市を消滅させてしまおうとした――瞬間だった。
「はあああああああああーーーーーーーーーーーっ!!」
１７号が、何者かによって蹴り飛ばされたのであった。

「な、なんだいアンタは!?」
それは若き青年であった。
山吹色の道着に身をまとい、その中には半袖の紺色のインナーを着用していた。
背中には大きく飯の文字が刻まれ、黒髪短髪の黒目の青年は、憎悪に満ちた表情で17号と18号を睨みつけていた。
「孫悟空!?　……いや違う、貴様は何者だ?」
その容姿は悟空を彷彿とさせるものだったが、別人であることを17号はすぐに見抜く。
「オレは……おまえたち人造人間を倒す者だ。はあああああああっ!!」
青年は気を目いっぱい高めると、その髪と瞳が明るく変色した。
逆立った金髪、エメラルドグリーンの瞳、そして全身をまとう黄金のオーラ。
17号と18号は、その姿に見覚えがあった。
「17号、こいつどこかで見覚えないかい?」
「ベジータと同じ変身をしている。ということはサイヤ人……そうか、わかった。オマエは孫悟飯だな?」
この時、悟飯17歳である。
立派な青年に成長し、幼かったあの頃よりも戦闘力をあげている。
(7年前……オレは家族を捨てた。そしてピッコロさんたちの仇を討つため、必死に修行を重ねてきたんだ。7年前の恨みを晴らし、平和を勝ち取ってみせる……ッ!!」
悟飯はますます気を高めていく。
「なるほど、7年前の戦いでピッコロとクリリンが捨て身でオマエを逃したんだったな」
「相当修行したみたいだね。でも金髪になったくらいじゃアタシらには勝てないよ」
「まあいいだろう……少しだけ遊んでやるか。いいだろ18号?」
「またアンタの遊び好きかい。好きにしな?」

「そういうことだ、オマエの相手はこのオレだ」
１７号はニヤニヤ笑いながら両手を広げた。
（シメたぞ。２対１じゃ厳しい戦いでも、１対１なら……まずは１７号を倒す!!）
こうして戦いの火蓋は切って落とされ、悟飯は１７号に対してもてる力の全てをぶつけて、激しい猛攻を繰り返した。
しかし悟飯の殴打も、エネルギー波も、どれ一つとして有効打にはならない。
むしろ１７号は不敵な笑みを崩さず、悟飯の攻撃を楽しんでいる様子だった。
「が、はぁっ!?」
悟飯は膝蹴りを食らい、蹲ったところで背中に激しい打撃を受け、地面に落とされた。
膝と手をつきながらもなんとか持ちこたえ、悟飯はフラフラしながら立ち上がった。
「なるほど、確かにパワーをあげたようだな……だけど７年前のベジータと差は無いな」
「なんだと!?」
「ふん、オマエ程度なら本気を出さなくてもラクに殺せるぞ」
「くそぉ!!　魔閃光!!」
手のひらを頭の前で合わせ、激しいエネルギー波を１７号に向かって撃つ。
躱されてしまったが、これは悟飯も想定の範囲内で、悟飯は魔閃光を放ってすぐに高速で移動して、１７号の懐に入り込んだ。
「もう一発!!」
すかさず１７号に向かって魔閃光をもう一発放った。
直撃したかに思われたが、１７号は悟飯の魔閃光を右腕一本で弾き飛ばしてしまった。
「なに!?」
悟飯は人造人間に対し、心底恐怖を抱いていた。
全身の震えが止まらず、嫌な汗が次々と吹きだしてくる。

まだ勝てない――人造人間との実力差を痛感し、絶望していた。
「スゴいよ、流石はサイヤ人。生身でよくここまで力をあげたものだな」
「くっ……!!」
「だけどオマエはそれで限界だ。見せてやる、エネルギー波とはこう撃つんだ!!」
刹那、17号はぱっと開いた手のひらから閃光が走った。
瞬く間にそれは悟飯のところへ到達し、悟飯に当たったソレは大爆発を起こした。
「うわあああああああああああーーーーーーーーっ!?」
悟飯の道着がボロボロになり、全身傷だらけになってしまった悟飯は仰向けのまま地面へと落下してしまい、力なくスーパーサイヤ人も解けてしまった。
悟飯は完全に気を失い、目を瞑って倒れてしまった。
17号が着地し、ニヤニヤ笑いながら悟飯を見下ろす。
「久しぶりに楽しめたぞ。放っておいても死にそうだが、一応トドメを刺しておくか……」
17号が悟飯にトドメを刺そうとした瞬間だった。
「なんだ!? げほっ、げほっ!!」
突然、18号が苦しそうに咳き込み始めたのだ。
17号が振り向くと、18号が立っていたあたりに謎の煙幕が立っていたのだ。
そう、18号に気を取られてしまったのが、17号の油断であった。
「どりぇりゃあああああああーーーーーーーーーーーーーーーっ!!」
刹那、17号は背中に灼熱を覚えた。
「う、うあぁぎゃあああああああああああああっ!!」
届かない背中に手を伸ばそうとしつつ、17号はその激痛に苦悶する。
「今だーカリン様!! 悟飯に仙豆を食わせるチャンスだぎゃ!!」
「ほーーーーーーーーーーーーーーーいっ!!」

それはヤジロベーとカリン様であった。
カリン様が１８号の周辺に煙幕を張り、１７号の注意をそちらに向けた瞬間、ヤジロベーはベジータの尻尾をも切り裂いた太刀で、１７号の背中を切り裂いたのである。
「くそぉー!!　よくもやってくれたね!!　波ぁーーーーーっ!!」
しかしヤジロベー達の作戦は失敗に終わろうとしていた。
「ひぎゃっ!?」
１８号のエネルギー波が、カリン様を掠めたのだ。
カリン様は１８号の心を読んでいたため、直撃こそしなかったものの、その戦闘力さは決して埋められるものではなく、カリン様はその一撃で瀕死の重傷を負ってしまった。
「こいつ、絶対に許さん!!」
「ごぉえっ!?」
そして反撃の態勢を整えた１７号のエネルギー波が、ヤジロベーの腹を貫く。
「……頭に来たぜ。まとめて消し去ってやる!!」
「やっちゃおう!!　１７号!!」
１７号は頭に血が上り、１８号と共に空高く飛んだ。
そして予定通り、都市を消し去ろうとエネルギー波を放った瞬間だった。
（カリン様も、ヤジロベーさんも……まだ辛うじて生きている……ッ!!）
悟飯が一気に飛び出し、ヤジロベーとカリン様を守るように立ち塞がったのだ。
「は　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ!!」
そして悟飯は、見様見真似で覚えた１７号のバリアを展開。
スーパーサイヤ人に変身し、その身で１７号と１８号の攻撃を受けようとした。
直撃の瞬間、まるで核爆発のような大規模な爆発に、この都市は包まれてしまった。

しばらくして爆炎が収まると、都市とその周辺は完全に荒野になってしまっていた。
「見たかい？　孫悟飯のやつ、あの二人を庇ったよ」
「ふん。だが三人ともくたばったようだな……さあ１８号、次の街へ行こう」
「ふふ、これでアタシたちの邪魔をするやつはいなくなったね」
倒れ伏した悟飯と、ボロボロのカリン様とヤジロベーを見た人造人間の二人は、三人が死亡したものと判断してその場を離れたのだった。
「……ご、悟飯は、気絶しておるだけじゃ……じゃが、ヤジロベーが……っ」
瀕死の重傷を負いながらも、カリンはなんとか意識を保っていた。
這いながら、カリンは仙豆の袋を持って、ヤジロベーへと接近する。
「か、カリン……さまっ」
ヤジロベーも意識が薄れてきていたものの、辛うじて生きていた。
「ワシは、もう……ダメじゃ……最後の、仙豆じゃ、お主が……食えっ」
「か、カリン様……お、オレはいいだ……アンタが、食ってちょ……」
「今の、世界に、必要なのは、仙人ではなく……戦士じゃ……」
「カリン、様……」
「これを食い、安全なところへ、悟飯を運び……悟飯の怪我を……頼んだ、ぞ」
カリン様は仙豆の袋をヤジロベーに手渡した瞬間、息絶えてしまった。
「か、リ、ン、さ……ま……」
ヤジロベーも息絶える寸前だったが、持ち前のタフさでなんとか堪えていた。
ヤジロベーは悲しみと苦痛を堪えつつも、なんとか仙豆を喉に通せた。
その結果、ヤジロベーの腹に開いた風穴が塞がり、ヤジロベーは元気を取り戻す。

「カリン様……そりゃねーがや!!　おみゃーさんが死んじまったら、もう誰も仙豆を作ることができねーでしょ!!」
ヤジロベーはカリンの亡骸を抱え、大声で泣き喚いた。
「……おい、悟飯、仙豆だがや。食え」
そしてヤジロベーは七粒の仙豆が入った袋から一粒を取り出し、それを悟飯の口に無理やり押し込んだ。
仙豆を食べ、復活するまでは多少のタイムラグが存在する。
その隙にヤジロベーはカリン様の亡骸を抱き抱え、悟飯に後目を向ける。
「悟飯、その仙豆はおみゃーさんが使え……オレは役に立てねーからよ」
そう言ってヤジロベーはカリン様を抱えたまま、どこかへ立ち去ってしまった。
これ以降、ヤジメベーを見た者はいなかった。
そして悟飯は意識を取り戻し、しばらく呆然としてから、自分が人造人間に敗北したことと、仙豆をヤジロベーたちが届けてくれたこと、そしてヤジロベーとカリン様は自分のために命を貼り、そして絶命したと思い込んだ。
悔しかった。
あれだけ修行したのに、全く人造人間には歯が立たなかった。
それどころか、ヤジロベーとカリン様という大切な仲間をまた失う結果となった。
最も悟飯は気絶をしていたため、ヤジロベーが生存していることを知らない。
「くそおおおおーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ!!」
やり場のない怒りを、スーパーサイヤ人に変身して晴らそうとする。
「人造人間め!!　絶対に、絶対に倒してやるぞ!!　もっと強くなって、絶対に!!」
それからも悟飯は闘い続けた。
成長してきたトランクスに稽古をつけつつ、人造人間に立ち向かい

続けたのだった。
それからさらに5年の歳月が流れ――エイジ779年。
自分の強さに限界を感じ始め、死期を悟りつつある悟飯に――ある出会いが訪れる。